

JICA's world

JUNE 2013 No.57

6

特集 ミャンマー

変わる国、動く人々

母のまなざし

from Uganda ウガンダ



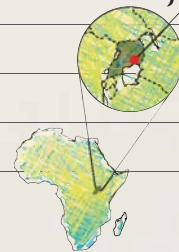
ウガンダで活動していた時、日本から家族が訪ねてきてくれた。久しぶりに再会を果たした彼らを連れて、石けん作りと手洗いの指導をした女性グループの村へ。子どもたちは張り切って、手作りの石けんで、一生懸命手を洗って見せてくれた。そしてそばには、その健気な姿をじっと見つめる母親たちがいた。

未然に防げるはずの病気で、命を落としてしまう子どもたち。でも、このお母さんたちがいる限り、この子たちは大丈夫、今ならそう思える。世界中どこに行っても変わらない、母のまなざしほど温かく、心強いものがあるだろうか。

私は日本からウガンダに来てくれた母に、初めてこう言えた。「産んでくれてありがとう」。グループのメンバーが、私の両親に向かって現地語で言ってくれた言葉。それをそのまま日本語にして、母に伝えてみた。ウガンダで命の重みに触れて、本当に、心からそう強く感じたのだ。

撮影：徳田容子（青年海外協力隊OG）

ナムトゥン県



あなたの作品募集中！

「my photo」では、あなたが撮影した写真を募集しています。貧困や環境問題などをテーマにした写真、国内外問わず国際協力の最前線で活動に励む日本人や途上国の人の姿、テレビや新聞ではなかなか報じられない土地の風景や人々の暮らしなど、国際協力や開発途上国を身近に感じられる写真を、撮影時のエピソードを添えてご応募ください。応募作品の中から毎号1枚、本コーナーで紹介させていただきます。

応募条件 ①応募者本人が撮影した作品に限ります。②被写体に関する肖像権は、応募者の責任において了解が得られているものとします。③写真は、解像度が300万画素以上(目安)で撮影されていること、また画像の記録形式はJPEGを推奨します。

応募方法 お名前、連絡先(電話番号とEメール)、エピソード(300～350字)、記名の可否をご記入の上、写真とともに応募先アドレスまでEメールでお送りください。

*応募作品は本コーナーのほか、事前確認の上でJICAの広報活動に活用させていただく場合があります。ご記入いただいた個人情報はこちら以外の目的では使用いたしません。また、応募作品はご返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。

応募 / 問い合わせ先

jica-photo@idj.co.jp

(JICA's World 編集部宛)

Contents

02 my photo 母のまなざし ウガンダ

04 特集 ミャンマー

変わる国、動く人々

誰もが安心して暮らせる祖国に
効率アップで経済を動かす
生命の水の道をつくる
日本人が見つけたミャンマーのここがおもしろい!



18 JICA STAFF 佐藤 恭之 JICAミャンマー事務所

19 JICA UPDATE

20 PLAYERS

健康を届ける 日本の鍼灸師

NPO法人命門会



22 HISTORY その思いを橋にかける 認定NPO法人国際インフラ調査会

24 JICA Volunteer Story 鶴田 俊美 日系社会シニア・ボランティア／ブラジル／日本語教育

26 世界とつながる教室 劇で伝える世界の貧しさと豊かさ 滋賀県湖南市立三雲東小学校

28 ココシリ 「ここが知りたい」 いろんなトピックを分かりやすく解説!

30 地球ギャラリー

ミャンマー

変化の中に生きる人々



37 イチオシ! 本・映画・イベント

39 MONO語り オーガニックコットンで心を豊かに

40 私のなんとかしなきゃ! 高橋 尚子 スポーツキャスター



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙

撮影：谷本美加(写真家)

修行のために朝の町を歩く尼僧の少女。変化の真ただ中にあるミャンマーは、彼女たちが大人になるころにはどのような姿を見せてくれるのだろうか



激動の国に生きる人々

通りにひしめく車、カラフルな布を身にまとい歩く人々。その先には円すい型の黄金の塔がそびえ立ち、神々しい光を放っている。ミャンマー最大の都市ヤンゴン。まさに今、変化の真ただ中にある。ホットな街だ。

ミャンマー。最近、日本でもその名をよく耳にするようになった。その現れか、この4月のアウン・サン・スー・チー氏の来日は、国内に「ミャンマー旋風」を巻き起こした。連日のように、各種メディアをにぎわせたのは記憶に新しい。

なぜ今、この国がここまで注目されているのか。

1988年に社会主義政権から軍事政権に移行したミャンマーは、国際社会と距離を置き、国民は厳しい生活を余儀なくされた。その中で、民主化を訴え続けたのがアウン・サン・スー・チー氏。1991年にノーベル平和賞を受賞したが、その人生は決して平たんなものとは言えず、自宅軟禁を幾度となく強いられた。

約20年にわたって続いた軍事政権。しかし最近になって、その状況は一変する。2010年の大統領選挙を経て、翌年、テイン・セイン大統領による新政権が発足。すさまじい勢いで民主化への歩みを進めているのだ。

アジアの最後のフロンティア。
そう称され、世界中から注目を集めている国がある。
長年の軍事政権を経て、民主化への道を歩み出したミャンマー。
新たな国づくりに向けて、未知なる可能性にあふれた国が今、
ついにそのベールを脱いだ。

編集協力：工藤年博 独立行政法人日本貿易振興機構（JETRO）アジア経済研究所 主任調査研究員
写真（P7コラムを除く）：谷本美加

特集

変わる国、動く人々



都市に残る伝統的な移動式屋台



事前検閲制度がなく、政府批判も含めさまざまな見解が新聞に掲載されるようになった



修行中の尼僧たち

ミャンマーの歩み

- 1886年 英国領インドに併合
- 1948年 「ビルマ連邦」として英国より独立
- 1962年 軍事クーデターによる社会主義政権樹立
- 1988年 民主化デモにより社会主義政権崩壊
- 1989年 国名を「ミャンマー連邦」に改名
- 1990年 アウンサンスーチー氏率いる国民民主連盟(NLD)が圧勝するも、政権移譲は行われず
- 2010年 08年に成立した新憲法に基づき総選挙を実施
- 2011年 ティン・セイン大統領による新政権が発足。国名を「ミャンマー連邦共和国」に変更
- 2012年 NLDが議会補欠選挙で大勝利



現在のティラワ港。貨物の輸送能力の強化に向け、新しい港の整備を計画



千里救命救急センターで研修を受けるミャンマーの医師



ヤンゴン郊外に経済の拠点が誕生!

東 南アジアの中でも勤勉で優秀な人材が多いといわれるミャンマー。約6,000万人という市場規模は大きな魅力だ。しかし実際、ミャンマーへの進出を足踏みしている企業が多い。その原因の一つが、交通や電力などのインフラの未整備だ。

そこで今、企業の拠点となる工業団地を整備する一大プロジェクトが動き出した。舞台は、ヤンゴンから南へ約23キロ、約2,400ヘクタール(東京ドーム約513個分)の「ティラワ経済特別区(SEZ)」。ミャンマーと日本の政府機関、企業などがタッグを組み、発電施設や変電所の建設、貨物輸送を担う港や道路の整備、上下水道の開発などが計画されている。工場やオフィスなどのスペースに加え、生活インフラとして、学校や病院、住宅、商業施設も建設し、2015年には一部区域が完成予定だ。

「企業が入ってくれば雇用が生まれ、国民の生活向上にもつながる。海外の技術や経営ノウハウを学ぶこともできて一石二鳥」と現地での期待も高い。日本とミャンマー、SEZの開発に向けて、共に歩みを進めていく。

日本の大災害の経験に学ぶ

2 008年5月初旬、ミャンマー南西部を襲ったサイクロン「ナルギス」。死傷者、行方不明者は合わせて約14万人、同国史上最大規模の自然災害となった。これを受け、JICAも国際緊急援助隊医療チームを派遣。緊急支援、復旧・復興の各段階において、国内外の支援が最大限活用された。

そしてこれを機にミャンマーでは、災害への備え、災害に強いまちづくりを強化しようという動きが出てきた。特に災害医療の分野では、広域医療支援の体制や医療施設の整備、災害医療に従事する人材の育成が急務だった。

この悲劇を二度と繰り返さないために。ミャンマーの医療関係者6人はその思いを胸に、大阪の千里救命救急センターとJICA関西が協働で実施した災害医療研修に参加。「ナルギスの時は、救われるべき命が救えずにやしい思いをした。阪神・淡路大震災を経験した地域での研修は、実践的でとても勉強になった」と同センター総合病棟のタンチョー医師。帰国後は日本で学んだノウハウを仲間と共有すべく、緊急医療の研修や救急隊員の養成、災害後のこころのケアを担当するカウンセラーの育成に取り組んでいる。

もしもの災害に備えて、ミャンマーにまかれた日本の技術の種が、現地で少しずつ芽を出し始めている。

DATA **ミャンマー**

首都: ネピドー
 面積: 約68万km²(日本の約1.8倍)
 人口: 約6,242万人
 言語: ミャンマー語
 宗教: 仏教、キリスト教、イスラム教など
 主要産業: 農業
 1人当たり国内総生産(GDP): 832ドル
 実質GDP成長率(2010年): 5.43%
 ASEAN加盟年: 1997年

アジアの。最後のフロンティア。今、ミャンマーはそう呼ばれている。それほど、その動向が、世界各国から注目されているのだ。2012年、現職の米大統領として初めて、オバマ大統領がミャンマーを訪問しました。これまで率先して進めてきた経済制裁をアメリカが緩和していくという姿勢が、国際社会に与えたインパクトは大きいと言えます。そう話すのは、独立行政法人日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所の工藤年博・主任調査研究員。2000年から現地に3年間駐在し、その後もこの国の動きを追い続けてきた彼は「本格的な改革が始まった」と実感しているという。

ミャンマーに秘められたポテンシャル

ミャンマーの面積は日本の約1.8倍、人口は約6000万人。中国、

しかし長年の軍事政権は、未来に進もうとするミャンマーに影を残した。今後、民主化をどのように進めていくのか、そして、この国の経済発展をどう着実に実現していくのか。この国で暮らすすべての人々が、豊かさを実感できるまでの道のりは長い。国際社会に扉を開いた今、他国との効果的な連携も不可欠だ。

オールジャパンで国づくりを後押し

「昨年から多くの日本企業がミャンマーに調査に訪れています。彼らにとっては、第2のベトナム。日本の成長戦略にとっても、企業のミャンマー進出は一つのカギとなるはず」と工藤さんは分析する。



ヤンゴンのシンボル、シュウエダゴンパゴダ



川で洗濯をする女性。地方では家事はまだ手作業が多い



田舎町から都市に出てきて寄付を集める少年たち



托鉢に向かう僧侶



いつでもどこでもミャンマーの人々は柔らかない笑顔を向けてくれた

止まった時間が動き出した

数年前には、まさかこの国を訪れるとは想像していなかった。軍事政権下で人々は抑圧され、経済制裁のために貧しい生活を送っている。そんなイメージを抱いたまま、ミャンマー最大の都市ヤンゴンに降り立った。

乾期が終わりがけた4月末、日中の気温は約40度。あまりの日差しの強さに、少し動くだけで汗だくになる。

市街地に入ると、イギリス統治時代の古めかしい建物があちこちに見える。露店に並ぶ色とりどりの野菜、魚、肉。道路脇では仕立て屋の青年がミンを踏み、マーケットでは若い女性が伝統衣装のロンジーを売っている。

街中を歩いている、ふとアパーを見上げると、窓からおじいさ

んが手を振ってくれた。目が合うと、誰もが柔らかない笑顔を向けてくれる。国際社会から孤立しても、彼らはしなやかに、たくましく、その時代を生き抜いてきた。ずつと変わらない、人々の穏やかな生活がそこにあった。

しかし今、この国に大きな変化の波が押し寄せている。2011年に新政権が発足し、新しい国づくりが進められているからだ。

すべての人の声を取り入れた開発のために

ヤンゴンから一路 南東へと車を走らせる。目指すのはカレン州の州都バアンだ。

カレン州は、この国を構成する約130の少数民族の一つ、カレン族の人々が多く暮らす地域。独自の文化や言語を禁止されるなど弾圧を受け、政府と武装勢力のカレン民族同盟（KNU）が60年以上も対立してきた。その状況が今、変わりつつある。

走り続けていると、地平線が見えるほど一面の平野だった景色が次第に変わり、遠くに山々が見えてきた。約5時間かけてたどり着いたバアンで、株式会社レックス・インターナショナルの橋本司さんと合流した。アフガニスタンの首都カブールの都市開発をはじめ、長年、国際協力に携わってきた専門家だ。



どのような開発が必要か、バインチョンの役場で行政官から情報を集める橋本さん(左手前から3人目)

「2012年、少数民族の武装勢力の中でも最大規模のKNUが政府と停戦に合意したことは、国が一つにまとまる大きな一歩」と橋本さん。カレン族の人々は、政府とKNUとの戦闘に巻き込まれ、村が焼き払われたり強制労働をさせられたりと、残酷な経験を

してきた。タイに逃れ、国境近くに9カ所ある難民キャンプで暮らす人は約14万人もいる。生まれ育った土地を離れ、国内の別の地域に避難している人は40万人ともいわれるが、正確には分かっていない。

「この地域はこれまで政府の統



誰もが安心して暮らせる祖国に

成長の裏側にある葛藤一。
長年にわたり、政府と少数民族の武装勢力が対立してきたミャンマーに、
今、平和への光が差し始めた。
その現状を確かめるため、変化の渦中にある現地へと飛んだ。



タイの難民キャンプからミャンマーに帰ってきた親子。家には家財道具がほとんどない



バインチョンで出会った難民キャンプから帰ってきた人々。ここ1年で増加しているが、正確な人数は把握されていない

勢力は、1991年に政府と停戦に合意。しかし、この地域にはほかに複数の民族が暮らしている。その一つ、シャン族の武装勢力と政府との対立が続いているため、道路や給水などのインフラも学校の建設も進まず、山がちという地理的条件も相まって、他州と比べると開発が遅れている。

現地に駐在するTPAの柴田京子さんは、「最初にバオ族のリーダーから、モノではなく技術を教えてほしい」と言われました。貧しくても誇りを持ち、自分たちの足で歩もうとしていてと感じました」と振り返る。

目を付けた。化学肥料や農業を正しく使えずに生産性が落ちてしまいい、また、せっかくなった作物も仲買人に安く買いたたかれてしまっていたからだ。

まずは研修を通じて、有機肥料や麦や大豆、コマなどを栽培する方法を指導。有機栽培」という付加価値を付け、高い価格で販売するためだ。さらに、共同組合を組織し、作物の共同出荷・販売を進めている。

「現地の人々の努力のかけあつて、収穫量は徐々に増え、アンテナショップや宅配など、独自の販売ルートも広がっています。このモデルをミャンマー全国に広げ、他の少数民族、そしてすべての農家の生計向上につなげたい」。そう柴田さんは展望を語る。

帰る家があり、仕事を持ち、家族と共に安心して暮らせる生活。「ここに帰ってこられて幸せ」。民族にかかわらず、すべての人がそう思えるように。この国の輝く未来のため、一歩一歩、人々を前を向いて進んでいる。



共同組合の仕組みを説明するTPAの柴田さん(左奥)。「共同で出荷量を管理・販売する仕組みを理解してくれる人が増えてうれしい」

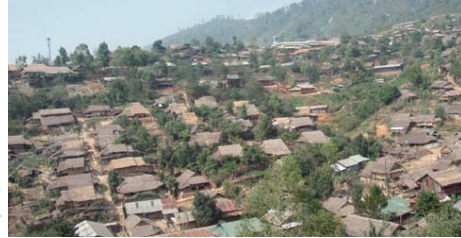


シャン州でTPAが支援するバオ族の人々。研修で有機肥料のつくり方を学ぶ



夫と7人の子がいるノーボーエイさん。「生活は大変だけど、家族や親せきに会えたから帰ってきてよかった」

タイ側に位置するウムピエンマイ難民キャンプ。キャンプで生まれた世代も多い



「水はどうやって確保していますか。」
「井戸でまかなっているところが多いですね」
「作物の出来はどうですか？」
「コマは自分たちの消費分は生

産できています。トウモロコシやコマも栽培していますが、収入源になるほどの量ではありません」
このように、人々の声、を聞いていく。「レンガを一つ一つ集め、積んで、家を建てていくようなもの。全体像を常に見据えて、開発のロードマップを描いていきます。30年にわたり、さまざまな開発途上国で開発計画づくりを支援してきた橋本さんの言葉は力強い。

「日本の専門家の皆さんは、私たちと共に良い計画をつくらうと支援してくれ。こうして定期的に話すことは、課題を見つけたら新しい情報を共有できる良い機会です」とバインチョンの行政官たちも話してく

「難民キャンプには電気も水もインターネットもあつたけど、外に出られなかった。ここは不便なこと多いけど、自由がある。帰ってきてよかった」
そう言って彼女たちは笑顔を見せる。

家に入らせてもらおうと、家具もなく、がらんとしていた。「タイ

治が及ばず、道路をはじめインフラの整備が遅れている。停戦合意により少しずつ治安が安定してきた今、どう開発していくか、難民や国内避難民が帰ってくることも踏まえた計画が必要だ」と橋本さんは話す。彼をリーダーに約20人の専門家チームがバアンに拠点を置き、カレン州と隣接のモン州を合わせた南東部一帯の開発に向けて調査を進めている。政府側、そして少数民族側の人々の、生の声を聞くためだ。

この日はバアンから車で3時間ほどのバインチョンへ。タイ国境側にあるメラ難民キャンプから近く、多くの難民が再定住することが見込まれている場所だ。

砂ぼこりを上げ、舗装されていない道を進む。車は上下左右に揺れ、捕まっていないと頭をぶつけそうだ。「これでもこの3カ月でだいぶ整備されたんですよ」と橋本さんは言う。

バインチョンの役場に着くと、農業、教育、保健医療、給水、警察など、それぞれの分野を担当する行政官たちが20人ほど集まっていた。

「日本の専門家の皆さんは、私たちと共に良い計画をつくらうと支援してくれ。こうして定期的に話すことは、課題を見つけたら新しい情報を共有できる良い機会です」とバインチョンの行政官たちも話してく

「日本の専門家の皆さんは、私たちと共に良い計画をつくらうと支援してくれ。こうして定期的に話すことは、課題を見つけたら新しい情報を共有できる良い機会です」とバインチョンの行政官たちも話してく

「日本の専門家の皆さんは、私たちと共に良い計画をつくらうと支援してくれ。こうして定期的に話すことは、課題を見つけたら新しい情報を共有できる良い機会です」とバインチョンの行政官たちも話してく

「日本の専門家の皆さんは、私たちと共に良い計画をつくらうと支援してくれ。こうして定期的に話すことは、課題を見つけたら新しい情報を共有できる良い機会です」とバインチョンの行政官たちも話してく

「日本の専門家の皆さんは、私たちと共に良い計画をつくらうと支援してくれ。こうして定期的に話すことは、課題を見つけたら新しい情報を共有できる良い機会です」とバインチョンの行政官たちも話してく

「日本の専門家の皆さんは、私たちと共に良い計画をつくらうと支援してくれ。こうして定期的に話すことは、課題を見つけたら新しい情報を共有できる良い機会です」とバインチョンの行政官たちも話してく

「日本の専門家の皆さんは、私たちと共に良い計画をつくらうと支援してくれ。こうして定期的に話すことは、課題を見つけたら新しい情報を共有できる良い機会です」とバインチョンの行政官たちも話してく

「日本の専門家の皆さんは、私たちと共に良い計画をつくらうと支援してくれ。こうして定期的に話すことは、課題を見つけたら新しい情報を共有できる良い機会です」とバインチョンの行政官たちも話してく



行政官から聞き取り調査をする金田さん(右端)。「人々とじかに接するまさに“現場”での仕事なので大変ですが、とてもやりがいがあります」

「逃げたときは着の身着のままだったから、何も持っていないのよ」。ここに住むノーボーエイさんから、そんな答えが返ってきた。「夫は農家の手伝いをしているけど、定職が見つからなくて。自分の土地を持って農業ができればいいのだけど。将来が不安です」。

そう、故郷に帰ってきてても、以前とまったく同じ生活ができるわけではない。彼らが生活を立て直せるよう、インフラはもちろん、仕事も必要だ。この地域で盛んなゴム栽培を地産産業に育てるというアイデアもある。どう実現させていくか、すべてはこれからだ。

有機農業で人々の生活を変える

所変わって、ヤンゴンから北東へ車で約10時間。JICA草の根技術協力事業を通じて、シャン州で少数民族支援に取り組み、日本のNGOがある。佐賀県を拠点に活動するNPO法人地球市民の会(TPA)だ。

同州に拠点を持つバオ族の武装

この効率の悪さは、企業活動にも影響を与えている。「ミャンマーは新たな投資先として日本企業の関心が高く、ここ1年で約400社が視察に訪れました。しかし、電気や道路などのインフラ不足に加え、金融機能が整っていないことへの不安から、現実的に進出を考えているのはごくわずかです」と野中さんは話す。

市場経済化が進み、海外からの投資も増えれば、どんどんお金の流れが活発になっていく。現金取引から電子決済へ、手作業から自動処理への転換が必要だ。そうすれば、銀行間、企業間の資金決済、調達や運用がスムーズになる。金融セクターの近代化。それこそ、経済発展のカギなのだ。

「金融の近代化で経済発展を引っ張る」

ミャンマーには5つの国営銀行と21の民間銀行がある。その中で最も「アナログ」と言われているのが、日本では日本銀行に当たるミャンマー中央銀行だ。

中央銀行の役割は、いわば民間の銀行をつなぐハブ。日本銀行は「日銀ネット」と呼ばれるネットワーク・システムを通して、国内の銀行を専用の通信回線で行っている。そのおかげで取引がオンラインで処理され、大量かつ瞬時の決済が可能に。銀行間でお金の

やり取りができる。しかしミャンマー中央銀行には、国内の銀行どころか、ヤンゴン、ネピドー、マナダレーにある自身のオフィスをつなぐオンライン・システムさえない。

平日の午後2時、中央銀行ヤンゴンオフィスを訪れると、ちょうど銀行間の手形の決済をしていた。部屋には100人ぐらいだろうか、各銀行の担当者がじっと待っている。その片隅では、4、5人の中央銀行のスタッフが手形を集めて電卓をたたき、手形交換の作業中。停電のため冷房が止まり、部屋の中はサウナのような暑さだ。

やっと作業が終わったかと思いきや、「金額が合わないのでもう一度やり直します」という声が部屋に響く。みんな、ぐったりした表情になる。「手形決済に毎日3、4時間かかる。各銀行の支店から接続して決済できるシステムがあったら便利ですが」と中央銀行のスタッフは話す。

「日本も30数年前はこうだったんですよ」と、ミャンマー中央銀行で国際通貨基金（IMF）ゼネラル・アドバイザーを務める田中克さんが教えてくれた。「中央銀行がなかなかオンライン・システムを整備できないうちに、民間の銀行の中には店舗同士をつなぐネットワークやATMを整備したところもある。中央銀行としては、自分たちも早急に近代化が必要だ」という危機感を持っています。

その思いを受けて、中央銀行の業務の効率化を支援しているのが日本。「日銀ネット」のシステムをミャンマー仕様に開発し、これから導入していく計画だ。「決済がオンラインでできるようになれば、一般の人々にも企業にも、そしてこの国の経済にもプラスになります。世界の最先端の日本の情報通信技術を生かして、早急に近代化を進めてほしい」と田中さんは期待する。

国を支える金融セクターの近代化に挑むミャンマー。まさにこれからが変革の時代だ。



ヤンゴンにもATMが引き出しのみできる

中央銀行ヤンゴンオフィスで、手作業で行われる手形の決済。後ろは、作業が終わるのを待つ各銀行の担当者



振り込みなどのシステムがないため、何をしても現金が必要。高額紙幣が少なく、金額が上がれば大量の札束に



「日本のATMは世界最先端。1台で紙幣を使い回すことで、引き出し、振り込み、預け入れに対応できます。中央銀行総裁などから「それは魔法が」と驚かれました」と田中さん



「日本での高額な買い物にはクレジットカードや振り込みでの支払いが常識ですが、ミャンマーではまだクレジットカード自体が普及していません。ヤンゴンに出張所を構えるみずほコーポレート銀行の野中鉄朗所長はそう話す。

実は、この国では大半の人が銀行口座を持っていない。その理由は、なんとといっても不便だから。窓口で手続きをしてから、お金を手にするまでなんと半日。紙の帳簿で口座を管理し、手作業で残高確認を行うため、時間がかかってしまう。

「現金に頼らざるを得ない社会」

ミャンマー経済の中心地、ヤンゴン市内の銀行窓口。カウンターに札束がどっさり積み重ねられていく。市民が自分の口座からお金を引き出したところだ。ミャンマーは「現金主義」。大きな買い物にはトラックいっぱい積んだ現金で支払うこともあるという。

「日本での高額な買い物にはクレジットカードや振り込みでの支払いが常識ですが、ミャンマーではまだクレジットカード自体が普及していません。ヤンゴンに出張所を構えるみずほコーポレート銀行の野中鉄朗所長はそう話す。

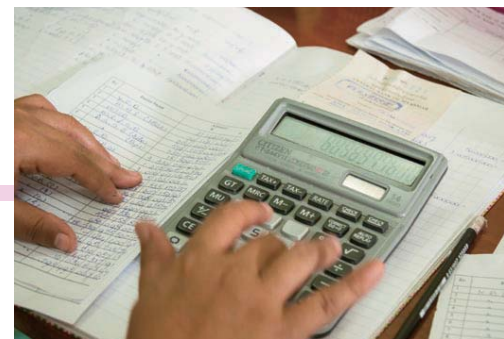
実は、この国では大半の人が銀行口座を持っていない。その理由は、なんとといっても不便だから。窓口で手続きをしてから、お金を手にするまでなんと半日。紙の帳簿で口座を管理し、手作業で残高確認を行うため、時間がかかってしまう。



効率アップで経済を動かす

経済活動のカギとなるお金の流れ。ミャンマーの着実な経済発展を支えるため、金融セクターの改革が始まった。

写真（P12右上以外）：谷本美加

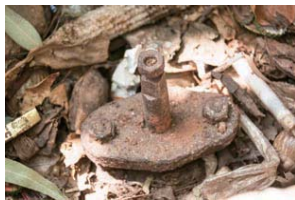




YCDCの職員と松岡さんは何でも相談し合える仲。チームワークを現場での取り組みに生かす



ヤンゴン市内の地図を見ながら、各地域への配水状況を確認する



鉄製のバルブの頭はさびてしまっていた

YCDCの職員と松岡さんは何でも相談し合える仲。チームワークを現場での取り組みに生かす

その技術を水問題に直面する途上国に環元すべく、福岡市は25年以上にわたり、職員を東南アジア

「ここから水が漏れてるぞ」「土を掘って確認してみようか」ヤンゴン市内の住宅地。土に覆われた道路を掘り起こすと、細長

「新しいうちに取替えが必要だ。そう指摘するのは、福岡水道局の松岡賢さん。2012年4月からYCDCに派遣され、市内の水道システムの改善に汗を流している。『大学で都市環境工学を学び、地元のごみ処理技術が開発途上国で活用されていることを知りました。自分の専門分野で、生まれ育った福岡と途上国の役に立てたらと、市の職員になりました。』

「とりあえず応急処置で対応しよう。ただ給水管が劣化している

「新しいうちに取替えが必要だ。そう指摘するのは、福岡水道局の松岡賢さん。2012年4月からYCDCに派遣され、市内の水道システムの改善に汗を流している。『大学で都市環境工学を学び、地元のごみ処理技術が開発途上国で活用されていることを知りました。自分の専門分野で、生まれ育った福岡と途上国の役に立てたらと、市の職員になりました。』

「とりあえず応急処置で対応しよう。ただ給水管が劣化している

「とりあえず応急処置で対応しよう。ただ給水管が劣化している

拡大する都市 足りない水

「ここから水が漏れてるぞ」「土を掘って確認してみようか」ヤンゴン市内の住宅地。土に覆われた道路を掘り起こすと、細長

「とりあえず応急処置で対応しよう。ただ給水管が劣化している



送水管の状況を確認。70年以上経過しているもの、今も現役で活躍中

生命の水の道をつくる

500万を超える人口を抱える大都市ヤンゴンでは、急速に進む開発にインフラの整備が追いついていない。そこで活躍しているのが、日常生活に直結する「水」を人々に届ける日本の技術だ。



配水管から分岐した給水管の状況を確認する



蛇口から出る水はあらゆる人の苦勞の結晶



写真：谷本美加



甲木 京子さん
KATSUKI Kiyoko

日本人が
見つけた

ミャンマーは周辺国との経済格差が大きく、多くの人が出稼ぎに行っています。そこで問題となっているのが人身取引です。“ここで働けば借金を返せる”などと言葉巧みに誘われ、強制労働をさせられてしまうことも。そんな人々の社会復帰を目指し、ミャンマー警察や社会福祉局の職員などが適切に対応できるようお手伝いをしています。

赴任する前は、ミャンマーの人は穏やかで、おとなしいイメージ。でも、いざ接してみると、そこには意外な素顔が一。人身取引の被害者とカウンセラーを体験するロールプレイ

どんな時も全力投球! みんなの前で堂々と発表

をすると、台本がないにもかかわらず、被害の状況や家族との複雑な関係、心情まで、実にリアルに演じてくれます。実際に教えるトレーニングでは、普段物静かでシャイな感じの人までが、突然自信に満ちたベテラン講師に大変身。ディスカッションや発表にもみんな積極的に、教室はいつも熱気にあふれています。実は意外と“はじめた”キャラクターだと思いますよ。



小川 美都子さん
OGAWA Misuko

小川さんの合図で阿波踊りを披露。すごい観察力でリズムはばっちり



ミャンマーのろう者は、なんとっても“お目が高い”。洞察力があって鋭いのです。「オガワ、昨日は飲み過ぎたでしょ?」「ちよっと太った?」なんて、手話でずばっと言ってくるのでドキッとします。

伝統衣装のロンジーを数枚で着まわしていた時なんて、「あなたはいつも同じロンジーだね」と、「ダメ出し」されてしまいました。それもそのはず、暑いお国柄ですから何十着も持っている人もいるぐらいで、一日何度も着替えるのが当たり前なんです。今ではミャンマー人に負けないくらい、いろいろな色・柄を取りそろえておしゃれを楽しんでいます。

ミャンマーには、ろう学校がヤンゴンとマンダレーに1校ずつしかありません。しかも初等教育だけなので、それ以降の教育現場には手話ができる先生もいない。就職もなかなかできません。私はろう者がもっと社会参加できるよう、手話通訳者の育成を支援しています。

特集 ミャンマー
変わる国、動く人々

ミャンマーのここが おもしろい!

ミャンマーで暮らし、現地の人々と接する日々。日本人にとっては、目にする事、聞くことすべてが“発見”だ。JICA専門家たちが見つけた“おもしろポイント”はこちら!

○運送、△造園…。ヤンゴンでは日本語がそのまま付いた中古車を多く見かけます。かつて、日本の地方都市を走っていたようなバスを目にすると、とても懐かしい気持ちになります。ヤンゴンは急速に経済が発展し、交通量も爆発的に増えています。交通網の整備が追いついていない。日本の常識からは、「ええっ!」と思うことが盛りだくさんです。



朝は乗客と野菜で車内がぎゅうぎゅうに

ヤンゴン近郊の環状線。約45キロを走るのに3時間かかる



す。売り子さんが歩いて車両に乗り込み、また下りて次の車両に移れるほど。郊外の農家の人々が野菜を売りに出歩くための行商列車となっていますが、今後は通勤・通学の足として多くの人にとって便利な交通手段になることを目指していきます。

バスやタクシーに乗って驚いたのは、仏像や僧侶の写真を運転席に貼っていること。そしてパゴダの前を通ると、車内からでも手を合わせる乗客を目にします。ジーンズをはいた今時の若者でもそうなので、実にミャンマーらしいなあと思います。



三宅 光一さん
MIYAKE Mitsunori



市原 裕之さん
TACHIHIRA Nobuyuki

2008年に発生したサイクロン「ナルギス」で、国内では約14万人が犠牲になりました。これを機にミャンマーは防災に力を入れるようになり、私は社会福祉救済・復興省で防災能力の向上を支援しています。



省庁の一室に職員が集まって説法を聞く

日々の業務を通じて驚かされるのは、人々の信仰心の強さです。敬けんな仏教徒が多く、年一回、各省庁にお祈りを聞いて話を聞くイベントがあります。その時にはスタッフ全員で寄付をし、お祈りに使う銀の鉢だったり、けさ、傘など、お坊さんが使う費用



寺に寄付する物を飾り付けてなぜかライブアップ

的なものを部署ごとにおみこしのようには飾り付け、会場で披露するのです。どんなものを寄付すればいいかと同僚に聞くと、「何はともあれマネー」との答え。寄付したお札は糸でぶら下げたり、何枚もきれいに折り重ねて花のように飾りつけられていました。もちろん誰も盗んだりしません! 生活に仏教が根付いているんだなあと感じる出来事でした。



ミャンマーでラカイン族が多く暮らす地域を訪れ、生活向上のためどのようなニーズが必要とされているのかヒアリングする佐藤さん(左手前から四人目)

裏方として ミャンマーの発展を支えたい

この3年、激動のミャンマーの姿を目の当たりにしてきたJICA Aミャンマー事務所の佐藤恭之さん。現地の人々の真のニーズをくんだ開発を進められるよう、この国の発展を縁の下で支えている。

人生を変えた 子どもたちの笑顔

初めて海外に行ったのは、大学1年生の時。友人に誘われて参加したスタディーツアーで、フィリピンのネグロス島を訪れました。子どもたちと植林をしたり、日本文化を紹介したりと楽しい時間を過ごしたのですが、地元で産業がないため、親たちは出稼ぎに行っているの聞いて驚きました。

村を去る時、子どもたちが手を振りながら見送ってくれる姿を見て、なぜか号泣してしまいました。自分は数日間だけ過ごして日本に帰るけれど、これからもここで生きていく彼らには、どんな未来が待っているのだろうか…。そう思ったなら涙が止まらなかったのです。これをきっかけに、開発途上国の農村の人々の暮らしを豊かにする仕事に携わりたいと思うようになりました。

長期的な視点を持つ 大切さ

これまでの業務で特に印象的だったのは、農村開発部で担当したモンゴルの案件。鉱山開発などによる環境破壊を解決するため、生態系保全の研究と環境教育の拠点となるセンターを造ることに。しかし、当時のモンゴルではこれらの取り組みは遅れ、ほとんど浸透していませんでした。そのため、自然環境



JICAミャンマー事務所
佐藤恭之
SATO Yasuyuki

大学院卒業後、2005年にJICAに就職。中東・欧州部、農村開発部を経て、2010年6月から現職。

ミャンマーのすべての人に 支援を届ける

省の担当者も、どのような施設にすべきかを検討するのに苦労していて、無理難題を持ち掛けてきました。「絶滅危惧種の川魚を展示する水槽をもっと大きくしたい」と言われた時には驚きました。技術的にも予算的にも、とても現実的ではなかったからです。日本が建設を支援しても、完成後に施設を運営していくのはモンゴルの人たち。だからこそ、「予算内で運営できるか」「十分な管理体制を確保できるか」と粘り強く話し合い、なんとか適切な規模で合意できました。目の先のことだけでなく、将来を見越した計画づくりの大切さを実感しました。

その後、ミャンマー事務所に配属されて、もうすぐ3年。その間に民主化が進み、街を走る車の数が見えて増えたり、報道の自由が確保されて新しい新聞が発刊されたりと、次々と変化が起こっています。

そして今、新しい動きとして、長年対立してきた少数民族の武装勢力とミャンマー政府が、和平合意に向けて交渉を続けています。日本も現地政府や武装勢力、そして一般の人々のニーズを集め、カレン州とモン州の開発計画をつくる調査を始めました。

私は裏方として、その調査がスムーズに進むようにサポートしています。例えば、武装



少数民族が暮らす地域で、適切な給水方法を探る

勢力の影響が強い地域へ調査に行くには移動許可が必要。国境省に申請するのですが、担当者が出張などで不在なら手続きがストップすることも。許可一つ取るにも、何週間もかかります。ですから、普段からできるだけ顔を合わせて信頼関係を築き、いざという時に効率的に手続きが進むように心掛けています。

また、タイ国境近くの地域の状況を把握する調査に同行した時には、ミャンマー政府の担当者から武装勢力と衝突が始まるかもしれないと連絡を受け、急ぎよ引き返したこともありました。これは、ミャンマー側に調査団のスケジュールを伝えていたからできたこと。彼らが安全に動けるよう、関係者に情報共有するなど気を配るのも私の仕事です。ミャンマーならではの大変さはありませんが、新たな国づくりに向かって歩みを進める勢いある国。今後も武装勢力と政府の和平交渉の動きを慎重に見極めながら、人々のニーズをくんだ開発に取り組んでいきます。

横浜市とフィリピンの都市開発を支援

01



ロペス駐日フィリピン大使(右)、林横浜市長、荒川JICA理事

4月16日、マニエール・ロペス駐日フィリピン大使、林文子横浜市長、荒川博人JICA理事がフィリピン大使館(東京都港区)で会談し、フィリピン中部の「メトロ・セブ」の都市開発に引き続き協力することを確認しました。メトロ・セブは、マニラ首都圏に次ぐフィリピン第二の都市圏。近年急速な発展を遂げ、現在の人口約255万人が2050年には2倍以上になると言われています。しかし、交通インフラや上下水道、廃棄物処理などの都市基盤の整備が追いつかず、成長の妨げになっています。

そこで白羽の矢が立ったのが、みなとみらい地区などの開発を手掛けてきた横浜市。長年フィリピンの開発を後押ししてきたJICAと手を組み、メトロ・セブの都市開発を支援することに。昨年末から調査が行われ、都市開発のビジョンを示した「メガ・セブ・ビジョン2050」が策定されました。



下水処理が追いついていない現在のメロ・セブ

そのビジョンの中では、ビジネスや観光などにおいて競争力を付け、公共交通システムや基礎インフラの整った住みやすいまちづくりが目標に掲げられています。JICAは、政府開発援助(ODA)や官民連携などを通じて、運輸交通インフラ、上下水道整備、廃棄物処理など個別の事業実施に当たり、横浜市内の企業をはじめ、日本企業の参画を後押ししていきます。また、横浜市水道局が設立した横浜ウォーター株式会社は、すでにJICAの技術協力プロジェクトを通じて、浄水処理や排水管理などの技術をメトロ・セブ水道区に伝える活動を進めています。

この取り組みは、JICAが地方自治体と連携して海外の都市計画全体を支援する初めてのケースになります。日本政府が推進する自治体の海外展開を、JICAがODAを使って支援する新たな形です。

日本の自治体を持つ都市開発などの知見やノウハウは、開発途上国の発展に大きな貢献が期待できます。中でも横浜市は、2011年10月にJICAと包括的連携協定を結び、国際協力に力を入れてきました。

JICAは引き続き、自治体の豊富な経験を途上国の課題解決に生かせるよう、連携強化を進めていきます。

02

国際野球連盟がJICAボランティアを表彰

4月14日、東京で「国際野球連盟(IBAF)第27回総会」が開かれました。ボランティア事業を通じて、世界各国で野球やソフトボールの普及に貢献してきたJICAは、今回の総会で特別表彰を受け、リカルド・フラックリーBAF会長から黒川恒男JICA理事に記念の盾が授与されました。

JICAは1970年以降、野球で224人、ソフトボールで54人のJICAボランティアを世界36カ国に派遣し、現在も11人が開発途上国で野球の指導に携わっています。

今回の表彰について、イシヨラ・ウィリアムスBAFアフリカ大陸代表副会長は「JICAボランティアなしには、アフリカ諸国

で野球とソフトボールの発展は考えられない。アフリカの人々は日本の若者を「アフリカの友人」と呼び、大変親しみを持っていました」と感謝の意を述べました。

この言葉を受けて黒川理事は「今後もスポーツ振興を通じてより良い世界の実現に向けて努めていきたい」と、活動のさらなる発展を誓いました。



授賞式に集まったJICAボランティアの経験者たち

03

国際理解教育に役立つ教材が完成

JICAでは、日本全国の子どもたちに世界の現状や課題に目を向けてもらえるよう、「国際理解教育実践資料集」世界を知ろう！考えよう！〜」を作成しました。物事を広い視野で考え、行動できるグローバル人材の育成を目指し、小中高の教育現場で教材として活用してもらうことが目的です。

本教材は、私たちの生活が海外、特に開発途上国の資源に依存していること、途上国には安全な水や食料が不足している国があること、温暖化が進んでいることなど、地球規模の課題について、イラストや図をふんだんに使って分かりやすく解説。教員向けのページには、学習のねらいや資料のポイント、持続発展教育(ESD)や学習指導要領との関連などを掲載しています。

また、国際協力を身近に感じてもらえるよう、



グローバル人材の育成に役立つ資料が盛りだくさん

う、学校、NGO、地域などでの取り組みを紹介するとともに、実際に授業で活用できる素材や、イラスト、資料、コラムなどを豊富に掲載し、子どもたちの理解がより深まるよう工夫がされています。

本教材は、JICAの国内拠点から学校関係者などを中心に配布していく予定です。ご要望の方は、お近くのJICAまでお問い合わせください。



伝統医学で使われる薬を売るヤンゴン郊外の薬局



国際協力の担い手たち

NPO法人命門会

健康を届ける日本の鍼灸師

はり・きゅう・指圧などで病気を治療する東洋医学。
ミャンマーにその技術を普及すべく、
NPO法人命門会は10年以上にわたり活動を続けている。



講習会では2人1組でつぼの位置を確認する



伝統医学では薬草を蒸して患部に当てて治療する



頭部へのはりの打ち方の手本を見せる深澤さん(中央上)

一つの縁がつないだ 伝統医学と東洋医学

ミャンマーで今、ある日本の技術が広まりつつある。人間の体にある361の経穴(つぼ)。そこにははりや打つたり、指圧をしたりして病気を治す東洋医学だ。

「そもそもは中国発祥ですが、つぼを細いはりで正確に打つ技術など、日本は独自の治療法を生み出してきました。痛くないのによく効くのが特徴です」。そう話すのは、NPO法人命門会の代表、片倉武雄鍼灸師。この技術をミャンマーに持ち込んだ仕掛け人だ。

命門会が設立されたのは1983年。当初は鍼灸指圧を日本国内に広めることが目的で、海外での活動は考えてもいなかった。しかし、そんな片倉さんの運命を変えたのが、ミャンマー出身のキンミョウラさんと出会ったこと。ミャンマーの農村部では、薬草を煎じて飲んだり、布に包んで蒸したものを患部に当てたりといった伝統医学が主流。安くてよく効くと評判で、伝統医学の医師を育成する専門の大学もあるほどだ。「でも実は、骨や関節、筋肉の痛みなどにはあまり効かないようなんです」と片倉さんは話す。

日本の大学院で東洋医学の効果を知ったキンミョウラさん。機材を使わず、医師の技術さえあれば治療できる東洋医学なら、ミャンマーの農村でも取り入れられるのではないかと。祖国

の人々の健康を守りたい一心で、友人を通じて知り合った片倉さんにアプローチしてきたのだ。

伝統医学の医師たちに、鍼灸指圧を伝えてほしい。「キンミョウラさんの熱意に胸を打たれ、これも何かの縁だ」と思い引き受けました」と片倉さんは振り返る。

そして2001年、命門会の挑戦が始まった。まずは年に数回、伝統医学を教える大学や病院などで講習会を開くことに。片倉さんと副代表の深澤智子鍼灸師を中心に指導を続けてきた。そして2010年には、

ミャンマー語を操る水口知香鍼灸師が加わった。大学でミャンマー語を学び、NGO職員としてミャンマーの農村で8年間活動。「植林などの支援をしていたのですが、多くの人が適切な医療サービスを受けられずに困っているのを見て、もたかしたさを感じていました。現地でも知り合った片倉さんと深澤さんに感銘を受け、鍼灸師になるために猛勉強。命門会のメンバーとなり、鍼灸師、通訳として活躍している。

全国に広がる 講習の成果

「今日は指圧を2人1組で練習しましょう」
「まずはお手本をしっかり見てください」
講習では毎回20人を受け入れ、指圧の位置や種類、はりの打ち方、指圧のコツ、その効果などをみっちり指導



講習参加者に修了証を渡す片倉さん(中央)

する。参加しているのは、全国から集まった伝統医学の医師。彼らが技術を身に付けることで地方にも技術が伝わり、新たな医師が育っていくという仕組みだ。
「みんなやる気があつて吸収が早い。1週間教えればすぐに実践できるレベルになります」と片倉さん。中には「薬草とはりをうまく組み合わせた治療ができないか」と伝統医学への応用を提案する人も。「薬草を使って患部の痛みを和らげてみては?」と深澤さんはアドバイス。「治療の幅が広がる、実践に役立つ技術が学べる」と評判だ。
これまでの参加者は300人以上。「この前、ヤンゴンの指圧マツサージ屋に立ち寄ると、たまたま教え子の店だったんです。私が教えた通りに、彼女の弟子が指圧をしてくれました。きちんと日本の技術が伝わっていることが実感できてうれしかったですね」と深澤さんはほほ笑む。水口さんも「技術を持った人が育てば、多くの人が治療を受けられる。そのお手伝いをできていることがうれしく」と話す。
現在はJICA草の根技術協力事業を通じて、鍼灸指圧の技術や理論をまとめたテキスト作りが進行中。いわばこれまでの活動の集大成だ。「大学や病院で人材育成に役立ててもらいたい」と片倉さん。ミャンマーの人々に健康を届けるべく、日本発の東洋医学は確実に定着しつつある。

飛行機事故の 悲しみを乗り越えて

今から35年前、1978年3月25日、建設省（当時）九州地方建設局で働いていた朝倉肇さんのもとに一本の電話が入った。土曜の昼下がり、その日は午前中で仕事を切り上げ、友人たちと談笑しているところだった。「ビルマ（ミャンマー）で飛行機が墜落したぞ！」

ただ海外で飛行機事故が起きただけで、わざわざ連絡が来るわけではない。朝倉さんはサーッと血の気がひいていくのが分かった。そこに乗っていたのは6人の日本人。その一人が、朝倉さんの元上司の国広哲男さんだったのだ。残りの5人は、建設省を含む日本の政府関係者たち。まさにミャンマーで始まるようになった、橋の建設支援の調査団のメンバーだった。「国広さんは人望も熱く、周りからの信頼も大きかった。私たちのシヨックも相当なものでした」と、当時建設省国際課でミャンマーへの協力を担当していた小室肇さんは振り返る。

ミャンマーの人々にとって、日々の生活の「恵み」である川、国の中央を縦断するエーヤワディー川をはじめ、日本の約1・8倍の国土にはいくつもの河川が流れている。そこで必要となるのが、橋だった。

しかし当時のミャンマーには、安全で丈夫な橋を造る技術も資材もない。一方で、70年代から瀬戸大橋など橋の建設ラッシュで盛り上がりを見せていた日本。そのノウハウをミャンマーの技術者にたたき込んでほしい。現地政府から、そんな依頼があった矢先の事故だった。

ミャンマー側も2人の技術者の命が奪われた。8人の精鋭を失い、もはやこのプロジェクトは続行が困難かとも思われた。しかし。「国広さんたちの思いを受け継ぎたい」と、建設省の職員が次々と手を挙げた。もちろん、朝倉さんたちも。約半年遅れでプロジェクトがスタートした。

橋がつないだ 両国のきずな

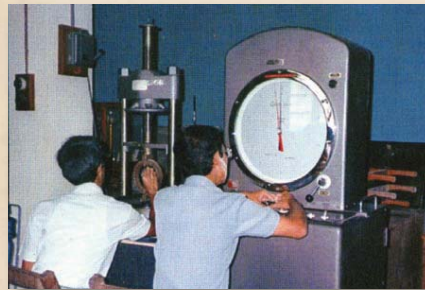
まずはミャンマー建設省などの技術者に、講義形式でみっちり理論を指導した。「日本人専門家はとにかく厳しかった。思いがぶつかり合って、授業中は熱い議論になることもありましたね」。そうなつかしそうに話すのは、ハン・ゾー前ミャンマー工学会会長。公共事業庁に配属されていた彼は、懸命に技術を学ぼうとしていた。「温厚な人柄、何事にも真摯に向き合う姿はみんなから慕われていました」と朝倉さんは話す。

理論が身に付いたら、その次は「On the Job Training」。講義で学んだことを実践し、ヤンゴン郊外に全長300メートルの「ツワナ橋」を建設しようというのだ。「迷ったらとにかく現場に行く。そうすると自然と答えが見えてくる。これも日本人から学んだことです」とハン・ゾーさん。85年、両国の技術者たちの思いが一つになり、ついにツワナ橋は完成にこぎつけた。それは、日本との友好の懸け橋のようにも見た。

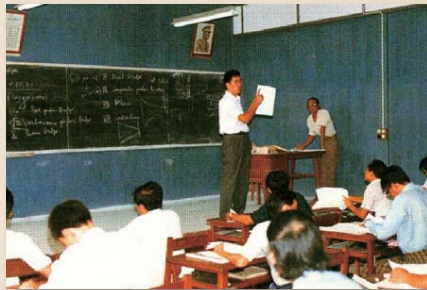
続いて日本とミャンマーは、新たにひとつ「ツワナ橋」を建設することに。しかし、88年の政変が状況を一変させた。混乱の中でプロジェクトは一時中断。無念にも、日本も支援を続けることが難しくなった。



ツワナ橋の建設現場。ミャンマーの技術者たちは理論を実践で生かす



測量などに必要な機材の使い方も手取り足取り指導



日本人専門家が教壇に立ち、橋の建設のノウハウを一から伝える



ヤンゴンの日本人墓地にある飛行機事故による殉職者の慰霊碑。今でも遺族や同僚が弔いに訪れている



ミャンマーと日本の技術者が力を合わせて建設したツワナ橋

その思いを橋にかける

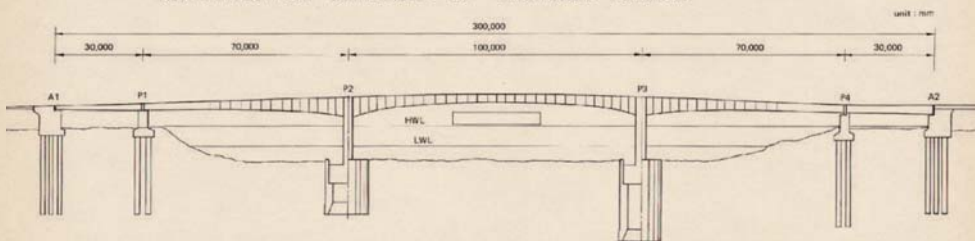
眼前に延びる河川にかけられたいくつもの橋は、ミャンマーの技術者たちの汗と涙の結晶。その裏側には、日本人が伝えた技術と思ひも秘められていた。

このまま終わらせるわけにはいかない。日本人の技術者魂を受け継いだハン・ゾーさんが自ら指揮を執り、それまでに習得した技術をフルに活用し、設計から施工までほとんど自力でツワナ橋を建設。公益社団法人土木学会が優れた橋梁プロジェクトに授与する「田中賞」という栄誉を勝ち取った。その後、他国の支援を受けず、独自に若手技術者の人材育成を進めたミャンマー。全国各地で橋の建設が進められ、その知らせは日本にも届けられた。

そして時はたち、2005年。ミャンマーに変革の光を期待しつつ、かつて志を共にした日本の建設省OBの有志が再び集った。もう一度、みんなであの地に橋をかけ、道路を造りたい。そこで誕生したのが、認定NPO法人国際インフラ調査会。理事長は小室さん、朝倉さんは副理事長としてメンバーに加わった。彼らと国境を超えて交流を続けてきたハン・ゾーさんは、04年には公共事業庁長官に就任。日本の古き友人たちの団体立ち上げの話を聞き、「ぜひまた一緒に仕事をしましょう」と感無量の様子だったという。

そして今、JICA草の根技術協力事業を通じて、彼らが挑戦しているのがエーヤワディー川周辺の道路整備。サイクロンなどの被害を受けやすいこの地域で、行政と市民が緊急時に協力して道路の修復などを行えるよう、マニュアルづくりや訓練を実施している。「インフラは国づくりの柱。これからの地道にミャンマーを支援していきたい」。30年の時を超えて集まった、両国の技術者たち。みんなまだまだ現役。第2の人生をかける覚悟だ。

CONSTRUCTION SCHEDULE OF THUWUNNA BRIDGE



ツワナ橋の設計図。きめ細やかな設計技術が日本人から受け継がれた



History

次世代への財産

鶴田 俊美

TSURUTA Tashimi

日本語教師として 日系ブラジル人と触れ合う

「今日はみんなで歌いましょう！」
教室の中から、子どもたちの元気な歌声と手拍子が聞こえてきた。日本では誰もが知っている有名な歌だが、実はここは：ブラジルのアマゾン川流域、マナウスにある日本語学校。輪の中心でギターを弾いている鶴田俊美さんは、この学校で日本語を教えている日系社会シニア・ボランティアだ。
高校生の時から音楽に熱中してきた鶴田さん。塾講師として働き始めてからも、外国人が集まるライ

JICA Volunteer Story

PROFILE

1966年静岡県出身。大学卒業後、塾講師、ラジオ局のパーソナリティー、日本語教師として勤務。2010年7月から、日系社会シニア・ボランティア（日本語教育）としてブラジルで活動中。



ブラジル人の教師たちに「日本語能力試験」や「日本漢字能力検定」の対策を指導。実践的で分かりやすいと評判

「楽しくて生徒に分かりやすい 授業のコツを伝えたい」

日系人が多く暮らすブラジルのマナウス。
日系社会シニア・ボランティアの鶴田俊美さんは、
より良い授業ができるよう、日本語教師のレベルアップに取り組んでいる。



ブハウスやバーなどでバンド活動を続けていた。「いつも応援してくれる友人たちが、日本語がうまく話せずに困っているのを見て、少しでも力になれないかと思っただけです。」一念発起して、日本語教師の資格を取った。

鶴田さんの地元は、日系ブラジル人が多く住む静岡県浜松市。日系人学校などで日本語を教えるうちに、「彼らのルーツや、現地の生活、文化をもっと知りたい」と思うようになりました。これまでの教師経験を生かし、日系社会シニア・ボランティアへの参加を決めた。

教師のやる気を引き出し 授業を改善

配属先は、日系人が多く暮らすマナウスの西部アマゾン日伯協会。かつてこの地に移住してきた日本人が設立し、ブラジル最大規模の日本語学校を運営している。「親が日系人だから」「日本のアニメが大好き」「日本企業の上司と話したい」などさまざまな理由で、子どもから大人まで約700人が通う。

鶴田さんが任されたのは、この学校のブラジル人教師のレベルアップだった。「赴任当日、授業を見学してみても、なぜボランティアが必要なのかが分かりました。テキストの内容を淡々と教える先生、時間を配分がきちんできていない先生、ゲームばかりをしている先生…。みんな自己流で、お世辞にも分かりやすい授業とは言えなかった。「同僚同士の交流がないことが原因の一つではないかと。そこで、みんなで授業のやり方を考える“場”をつくらうと思っただけです」と鶴田さんは話す。

そこで「週に一度、みんなで勉強会をやるう！」



a.ギター片手に、歌詞の意味を教えながら日本語の歌を歌う鶴田さん
b.一時帰国中に浜松市内の中学校で講演。「任期終了後も、日本の子どもたちに世界のことを伝えていきたい」
c.日本文化の紹介イベントを告知するため、地元のラジオ番組に出演したことも
d.生徒の質問には全員が理解するまで丁寧に答える

と呼び掛けたが、「実は、あまり乗り気でない先生もいたんですよ」と鶴田さん。そこで最初は「ムードメーカー」に徹し、「立ち位置や視線、声の張り方を工夫してみています」「しりとりや早口言葉を取り入れて単語を覚えるのも楽しいですね」など、日本での経験を踏まえてアドバイス。すると現地の先生たちも、少しずつ興味を示すように。「身近な話題を取り入れては?」「板書は色分けすると見やすい」「ゲームは授業の後半で入れるのが効果的」とそれぞれの「コツ」を紹介。「いろいろな授業を取り入れていこう」という動きが出てきた。

また、勉強会には「日本語能力試験」や「日本漢字能力検定」の対策講座も取り入れ、みんなで合格を目指して勉強することに。「講座の後には、その日教えた日本語をすぐに使ってください。みんなやる気があつてうれしいですね」と鶴田さん。試験に挑戦することで、彼ら自身の学ぶ意欲も高まってきた。

鶴田さんは授業にもアシスタントとして参加し、発音や文法などの指導、歌やゲームの盛り上げ役として大活躍。持ち前の明るさであったという間にクラスに溶け込み、生徒たちから大人気。廊下を歩いてくると、「トシミ先生、トシミ先生!」「次はいつ来てくれるの?」「発音を教えてください!」と自然と人が集まってくる。「盆踊りや運動会、文化祭などのイベントでも、生徒たちと一緒に踊ったり劇をしたりと、この学校に欠かせない存在になった。「日本語を通して一つになれるのは最高!」と鶴田さんは笑う。

そんな彼の姿勢に刺激を受け、教師たちの授業への意気込みが変わってきた。楽しくて分かりやすい日本語の授業をしてほしい。鶴田さんの思いが、ブラジルの大地に根付き始めている。

出前講座でそんな話を聞いた6年生が、自分たちで台本から作った劇の「コマだ」。

世界に目を向け、人権を尊重し、優しくとたくましさや身を付けてほしい。三雲東小では先生たちのそんな思いから、総合的な学習の時間を使ってさまざまな取り組みに挑戦している。その一つが、3年生の「せかいのなかよし」という授業。JICA研修員やALTの先生との交流を通じて、彼らの国の文化や歴史について勉強したり、自分の関心がある国について調べたりしている。

さらに、6年生で力を入れているのが「平和学習」だ。戦争さえなければ平和、というわけではない。学校に行けない、安全できれいな水が手に入らない、食べ物がない。そんな生活を、平和、と言えるだろうか。子どもたちも自分たちで考える力をはぐくんでもらうべく、JICAボランティアの経験者などを招き、開発途上国のリアルを学んでいる。

そして昨年、三雲東小の6年生に話をしたのが上井さんだった。

「日本では学校に行くのが当たり前。でも世界には、家のお手伝いなどで学校に行けない子もいるんです」

「世界できれいな水を使えない人は約8億人。清潔なトイレを使えない人はなんと25億人！」

どの話も、子どもたちにとっては驚きの連続。「3時間歩いて学校に通う子もいるなんて」「平和ってみんなが豊かになることなのかな」。一人一人



劇の最後には途上国の現状について学ぶクイズを出題



シナリオも大道具も子どもたちの手作り



コスタリカやアルゼンチンなど、中南米からのJICA研修員と交流する3年生



開発途上国がどんな課題を抱えているかを紹介する上井さん

劇の様子は地元の新報にも取り上げられた(京都新聞提供)



が多くの発見をした授業だった。

途上国を舞台にした劇で学びを発信

自分たちが知ったことを、ほかの学年のみんなにも伝えられないか。平和学習の授業で刺激を受けた6年生から、自然とそんな声が上がっていった。そこで学校恒例行事の人権集会で取り組む劇のテーマに、上井さんの話を選ぶことにしたのだ。

タイトルは「平和について考えよう」

「Nベネズエラ」。主人公は、もちろん隊員時代の上井さん。現地の小学校での彼女の奮闘ぶりを再現することに。世界にはいろいろな暮らしている日本人がいることを知ってほしい。6年生の実行委員が中心となって、みんなの思いを込めてシナリオを完成させた。

そのほかにも、大道具作り、演出、配役決め…。劇の準備は、すべて子どもたち主体だ。みんなで「いいものを

作りたい」と猛練習。「ベネズエラの子もたちを演じるならやっぱり半袖を着た方がいいよね」と、寒さに耐えながら演じきった。

そして終演後、会場からは割れんばかりの拍手が。自信にあふれた子どもたちの笑顔。先生たちはステージ上の彼らを温かい目で見守っていた。

この経験をきっかけに、外の世界への関心が高まった三雲東小の子どもたち。「ベネズエラの暮らしは大変そうだけど、みんなが助け合っているから生活しているのが素敵」「栄養士になって、貧しい国の特産品で栄養たっぷりのメニューを作りたい」と、はつらつとした笑顔で話してくれた。

本当の豊かさとは何か。その答えをそれぞれの形で見つけた子どもたち。この春、卒業を迎えた彼らは、次のステージへと飛び立っていった。

※三雲東小の教育目標「人間尊重の精神をふまへ、たくましさややさしさが調和した心豊かな子どもの育成」にのっとり、人権にかかわる学習内容などを発表する場。

劇で伝える世界の貧しさや豊かさ



世界には知らないことがたくさんある。出前講座で聞いた青年海外協力隊員の経験を広めたいと、滋賀県湖南市立三雲東小学校の子どもたちが選んだ手段。それは「劇」だった。

世界とつながる教室

青年海外協力隊員から学ぶ新たな世界

「今日は100マス計算を勉強します。縦に10マス、横に10マスを書いてくださいな」

「先生、僕、定規がないから線が書けないよ…」

「じゃあ、先生の貸してあげるね」

しかし、2日たってもまだ定規は返ってこない。

「あの定規、どうしたの？」

「隣の席の友達も困っていたから、半分に分けて貸してあげたんだ」

滋賀県湖南市立三雲東小学校の体育館のステージで繰り広げられるやりとり。設定はベネズエラの小学校、青年海外協力隊員と現地の子どもたちの会話だ。

貧しさゆえに、文房具も満足に買えないベネズエラの小学生。それでも、友達同士で助け合いながら、たくましく生きている。ベネズエラで協力隊員として活動していた上井香奈さんの



ベネズエラでの協力隊員の活動を劇で紹介。全校児童が食い入るように見ていた(京都新聞提供)

ココシリ

「ここが知りたい」
国際協力に関係する
いろんなトピックを
分かりやすく解説します！

政策

「岸田外務大臣が中南米を歴訪」 経済協力を強化し “絆”を深める



メキシコのパネハ・ニエト大統領と



ペルーのオリランタ・ウマラ大統領と



パナマのリカルド・マルティネリ大統領と

～訪問スケジュール～

- 4月28～29日……メキシコ
- 4月30～5月1日……ペルー
- 5月1～2日……パナマ
- 5月2～4日……ロサンゼルス

岸

田文雄外務大臣は4月28日から5月5日にかけて、メキシコ、ペルー、パナマの中南米3カ国と、アメリカ・ロサンゼルスを歴訪し、各国首脳らと会談した。その中で、経済協力の強化や貿易・投資拡大などを通じて、各国との関係をより深めていく考えを示すとともに、「環太平洋パートナーシップ（TPP）」協定・交渉における協力を呼びかけた。

最初の訪問国はメキシコ。日本とメキシコは2005年4月に経済連携協定（EPA）を発効し、自動車関連を中心に、日本からの貿易や投資が増加傾向にある。さらに今年から来年にかけては、1613年に伊達藩の支倉常長率いる「慶長遣欧使節団」が出航し、翌年メキシ

コに到着してから400周年を記念して「日メキシコ交流年」とされている。岸田大臣はベニャニエト大統領を尊敬した際、このタイミングをとらえて両国の関係強化をより一層図っていきたい考えを示した。

続いて4月30日には、ペルーを訪問。同国とは今年が日本との外交関係樹立140周年にあたり、昨年3月にはEPAも発効するなど良好な関係にある。岸田大臣はオリランタ・ウマラ大統領を表敬し、今後も緊密な関係を築いていきたいと述べるとともに、日本企業の進出を促すためのビジネス環境の改善を求めた。

また、ラファエル・ロンカリオ外相との会談では、日本の中小企業の製品・サービスや次世代自動車などの購入資金に充てる「フン・プロジェクト無償資金協力」に関する2件の交換公文に署名した。両案件の供与額は計14億円。同国の社会・経済の開発や環境対策を後押しするとともに、日本企業の進出につながる効果も期待されている。

5月2日には、パナマのリカルド・マルティネリ大統領を表敬した。パナマを日本の外相が訪れるのは今回が初めて。岸田大臣は、日本が世界第4位のパナマ運河の利用国であり、海運や通商などの面で関係性を強めてきた点を強調。同国から要請を受けている首都圏の公共交通機関整備計画について、JICAが円借款の実施に向けた調査

日

本政府は4月15日、「円借款の戦略的活用のための改善策」を発表した。

円借款は、開発途上国に対して、その国の発展や開発に使う資金を長期・低金利で提供する制度。今回の改善策では、その適用分野、対象範囲などを広げるとともに、「より有利な金利条件を示した。途上国とプロジェクトに携わる日本企業の双方にとって、より魅力的な制度にすることで、新興国などの海外市場の成長を日本経済の活性化につなげたい考えだ。

相手国からの返済金利を優遇する重点分野については、従来の「地球環境・公害対策」「人材育成支援」「中小企業」「平和の構築支援」の4つを「環境」「人材育成」の2つに整理・統合するとともに、「防災」「保健」「医療」の2つを新たに追加。この4分野に対しては

政策

「円借款制度の改善策」 途上国と日本企業にとって より魅力的な制度に

年0.01～0.6%と、従来よりもさらに有利な金利を適用することとした。

また、プロジェクトで使う技術や資機材を日本企業のものに限定する「本邦技術活用条件（STEP）」制度について、「医療機器」「防災システム」「防災機器」の2つを新たに適用分野として加え、日本企業の海外子会社を主契約者として認めるなどの改善を図った。さらに、この制度における返済金利を一律0.1%に引き下げ、より強い競争力になるようにした。

このほかにも、比較的發展の進んだ中進国やそれ以上の所得水準の途上国に対して、より柔軟に円借款を供与できるように変更。途上国の要求に応じて、迅速に災害時の対応資金を融資できる新制度の創設なども盛り込まれた。



日本の円借款で整備されたタイのスワンナプーム国際空港とタイとラオスをつなぐ第2メコン国際橋（撮影：奥野安彦）

主な改善のポイント

- 「環境」「人材育成」「防災」「保健・医療」の譲許性を引き上げ
- 日本の知見や技術の積極的活用
- 中進国、中進国を超える所得水準の開発途上国支援への一層の活用
- 災害復旧スタンバイ借款の創設
- ノン・プロジェクト型借款の一層の活用

政策

安

倍置三内閣総理大臣は4月30日から5月3日まで、サウジアラビア、アラブ首長国連邦（UAE）、トルコの中東3カ国を訪れた。今回の訪問は、資源・エネルギー分野を中心とした従来の関係を越えて、政治・安全保障、経済、文化など、より幅広い分野での関係を構築していくことがねらい。経済界を代表する総勢100人を超えるミッションも同行し、日本企業の「売り込み」も図った。

最初に訪れたサウジアラビアでは、日本の総理大臣として初めて中東政策について演説。テロ・治安対策や民主化支援といった協力を通じて、中東地域の安定に一層の役割を果たしていく考えを示した。中東・北東アフリカ地域に対し、日本が新たに総額22億ドルの支援を行うことを表明。サウジアラビアとUAEの両国とは「安全保障対

「安倍総理大臣の中東訪問」 安全保障や農業・医療など より幅広い関係を目指す

話を、トルコとは「外相定期協議」をそれぞれ新設することで合意した。

また、中東地域との関係をより深めるために、日本の強みである農業や医療などの分野での協力を強化していくことをアビュル、省エネや再生可能エネルギー、原子力分野でも貢献できる点を強調した。

今回、サウジアラビアと投資協定、UAEと租税条約に署名したほか、UAEとトルコとは原子力協力に関する協定などを結んでいる。さらにトルコとは、経済連携協定（EPA）に向けた作業を進めることも合意した。

このほか、文化的・人的なつながりをさらに強めることを目的として、今後5年間で約2万人の研修、専門家派遣を行うとともに、中東からの留学生受け入れ数を増やす方針も併せて示した。



アラブ首長国連邦

サウジアラビア

首都：リヤド
面積：約215万km²（日本の約5.7倍）
人口：約2,800万人（2011年）

アラブ首長国連邦（UAE）

首都：アブダビ
面積：約8.3万km²（北海道とほぼ同じ）
人口：約790万人（2011年）

トルコ

首都：アンカラ
面積：約78万km²（日本の約2倍）
人口：約7,600万人（2012年）

～訪問スケジュール～

- 4月30～5月1日……サウジアラビア
- 5月1～5月2日……アラブ首長国連邦
- 5月2～3日……トルコ

Myanmar

[ミャンマー]

写真・文＝宇田有三(フォトジャーナリスト)

変化の中に
生きる人々



バインジーと呼ばれるポルトガル系の子孫が今も存在する
(ザガイン地域、2007年)



観光客の姿をほとんど見かけることのないダウエイの海岸(タニンダイー地域、2003年)

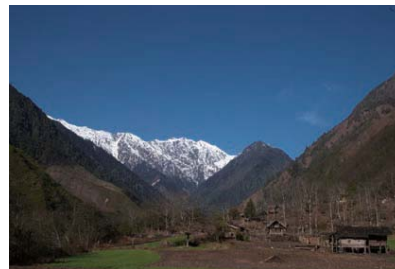
「最近、大統領と会ったんだ。ところで、この国の昔って、どんな感じだったの？」
私は彼に、北部カチン州で初めて雪山を見たこと、最南端の漁村にはマレー系のバシューと呼ばれるムスリムが住んでいること、青や緑の目をしたポルトガル系の子孫の民族がいることなど、北から南まで、フアインダーを通して見てきたことを話した。私は彼の熱いまなざしを受け、自分のこれまでの経験を、なんとか現地の人々と共有できないかと強く思うようになっていった。

2011年8月、北部の都市マンガレーのインターネットカフェで隣り合った若い男性から話しかけられた。
「どちらの国の方ですか。ミャンマーにはいつ来たのですか」
「日本からだよ。実はね、19年前から毎年、通っているんだ」
「僕が生まれる前からなんだ…」
彼はインターネットそっこのけで、身を乗り出してきた。
「今回はバモーから船で川を下って来たんだ。(アウンサン)スーチーさんの写真があちこちに出回っているけど何が起ったの？」
「最近、大統領と会ったんだ。ところで、この国の昔って、どんな感じだったの？」
私は彼に、北部カチン州で初めて雪山を見たこと、最南端の漁村にはマレー系のバシューと呼ばれるムスリムが住んでいること、青や緑の目をしたポルトガル系の子孫の民族がいることなど、北から南まで、フアインダーを通して見てきたことを話した。私は彼の熱いまなざしを受け、自分のこれまでの経験を、なんとか現地の人々と共有できないかと強く思うようになっていった。

カレン民族の伝統舞踊として知られるドーン・ダンス(カレン州、2009年)



最南端の漁村に暮らすマレー系のムスリム(タニンダイー地域、2007年)



中国国境に近い最北端にはチベット人が暮らす村がある(カチン州、2007年)



エーヤワディー川に水くみに出かける幼い尼僧たち。国民の8割が上座部仏教を信仰する(ザガイン地域、2003年)



テインセイン大統領とアウンサンスーチー氏が会談したニュースを報じる週刊誌。だが、若者はおっぱらスポーツ紙の方に興味があるようだ(ザガイン地域、2011年)



近年、急速に開発が進むヤンゴン(2012年)



今や、このような裏通りでの遊びも消えつつある(ヤンゴン、2002年)



シュエモドーパゴダを背景に朝日が昇る(バゴ地域、2005年)



今でも人口の7割が農業に従事する(シャン州、2005年)



昔ながらの鍛冶屋も現役で働く(ラカイン州、2010年)

私の手元には、もはやもう二度と撮影できない、軍政権時代の写真が10万枚近くある。軍が統治する時代であっても、たくましく、優しく、したたかに生きた人々の日常を写したものだ。民政移管した今、あの時代の風景を撮ることはもうできない。

この数年、街中でアウンサンスーチー氏の写真はありふれた光景になってきた。だが依然、反政府ゲリラや難民、ムスリムなどの姿はまだまだ慎重を要する題材であった。

しかし幸運なことに、2012年8月末、事前検閲の制度がなくなった。その勢いもあつたのか、現地の大手出版社の幹部から「よし、君の写真集を出版しよう」とゴースサインが出たのだ。2013年2月、ヤンゴンの書店に写真集が並び、この国をよく知る人からは、「本当か、よく出版できたなあ」と驚かれた。私自身、この間の動きは、大変化だが、必ずしも「民主化」だとは思っていない。確かに、国内最大の都市ヤンゴンの変化は目を見張るものがある。だが、今でも地方を回ると、その変化が広がっているとは思えない。人々の生活や意識はそう簡単に変わらない。この国を歩き続け、肌で感じた経験がそう告げるのである。



ムスリムは人口の5%ほど。シーア派のムスリムはさらに少ない(ヤンゴン、2010年)

巻き方【男性】



左右に広げ片方ずつ中心に寄せる

左右に交差させてねじる

ねじった片方を内側に入れ込み、残りの片方を上にかぶせる

完成!

みんなに人気の
おしゃれアイテムと言えば

ロンジー

ロンジーとはミャンマーの伝統衣装。普段着としてはもちろん、学校の制服に、農作業用に、さらには、お祝いごとの晴れ着としても大活躍だ。

筒状の大きな布をスカートのように巻き付けて、女性はサイドで、男性は中央でとめてはく。下からの風通しが良く、気温が高いミャンマーでも快適に過ごせる。色柄や生地の種類も豊富で、おしゃれも楽しめる。最近、都市部ではジーンズやスカートを若者も増えているが、やっぱり昔から親しまれているロンジーが一番快適!



民族によって色や柄もさまざま

巻き方【女性】



腰の部分をpushして片方に引っ張る

折り返して反対側に持っていく

脇にねじって入れ込む

4

完成!



取材協力：NPO法人日本ミャンマー・カルチャーセンター

Culture of Myanmar

ミャンマーの文化を
知ろう!

定番料理と言えば
お茶っ葉入りサラダ

ラペットウ

ミャンマーの食卓は、日本に似た定食スタイル。一汁三菜、とまではいかないが、メインのおかずを囲むように、ご飯、スープなどが並べられる。豚肉や鶏肉の煮込み、川魚の揚げ物、豆のスープがおかずの定番。インドや中国など隣国からの影響もあり、カレーやチャーハンなども人気だ。

また、お茶っ葉を煎じて飲むだけでなく、「食べる」のも特徴。発酵させた茶葉は適度に塩味が効いておかずにもつまみにもなり、ゲストへのおもてなしに欠かせない。代表的な料理が「ラペットウ」というサラダ。材料は豆、キャベツ、トマト、ニンニク、そしてお茶っ葉。現地の人たちは「お茶食べようよ」と誘い合い、野菜の種類や辛さをアレンジしたラ



ペットウを囲んで話を弾ませる。

リトル・ヤンゴン。そう称されるほど多くのミャンマー料理店、雑貨店などが立ち並び東京・高田馬場。中でも古くから店を構える「ミンガラバー」では、来日25年になるユーユーさんが、現地から取り寄せたお茶っ葉を使ったラペットウをはじめ、バラエティー豊かなミャンマー料理を提供してくれる。

【RECIPE】

●材料(2人前)

大豆15g/ピーナツ15g/レンズ豆15g /ニンニク2片/発酵した茶葉60g※/キャベツ8分の1個/トマト4分の1個/ゴマ15g/ナンプラー・レモン汁・塩各少々

- 2時間ほど水につけた大豆とピーナツ、レンズ豆、きざんだニンニクを高温の油でからりと揚げる。
- ①を冷ましたら、油につけた発酵した茶葉、千切りにしたキャベツ、くし型切りにしたトマト、ゴマ、ナンプラー、レモン汁、塩を混ぜ合わせる。

※発酵した茶葉はミャンマー食品店で購入できる。

【SHOP INFORMATION】



ミンガラバー

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場
2-14-8 NTビル3F
TEL:03-3200-6961
営業時間:11時半~14時半、
17時~23時半(LO:23時)
月曜定休(祝日は営業)

新着情報 イチャオシ!

M OVIE

『モンゴル野球青春記 ~バクシャー~』

「モンゴルで野球を教えなさいか」。ある日、そんな誘いを受けた元高校球児の淳。彼に話を持ちかけたのは、野球を通じてモンゴルと交流を続けていた徳島県阿南市。しかしいざ現地に行ってみると、野球そのものがほとんど知られていない。やっとのことで見つけたチームですら、監督は元ボクサー。野球場もなく、選手たちは草原や体育館で練習をしていた。そんな状況の中で、淳は野球の楽しさを知ってもらおうと奔走するのだが…。モンゴルに渡った日本人青年の実話を基にした作品。



2013年／日本・モンゴル／120分

監督：武正晴

出演：石田卓也、ベヘーオチル・ジャルガルサイハンほか

公開：6月15日(土)よりK's cinema(東京)ほか全国順次公開

URL：mongolyakyu.com/

配給・問：アールグレイフィルム TEL：03-3353-5331

E VENT

『世界報道写真展2013』

約100都市で開かれ、約200万人が来場する世界最大規模の写真展。56回目を迎える今回は、2012年に撮影された約160点の作品を展示する。大賞に輝いたのは、イスラエルのミサイル攻撃で命を落としたパレスチナの子どもの運ぶ男たちを写した作品。そのほかにも、岩手県陸前高田市に残る東日本大震災のつめ跡、内戦が続くシリアの惨状など、世界の“今”を伝える写真がずらりと並べられている。私たちは今、何に目を向けるべきかを考えてみよう。

会期：6月8日(土)～8月4日(日) 10～18時(木金は20時まで) 月曜休館

会場：東京都写真美術館 TEL：03-3280-0099

URL：www.asahi.com/event/wp/h/

※8月以降は、大阪、京都、滋賀、大分を巡回予定。

B OOK

『アイデアは地球を救う。 希望をつくる仕事 ソーシャルデザイン』

人権、環境、教育、福祉など、世界が抱えるさまざまな課題。それを解決に導くのは、“ちょっとした”アイデア。特別な才能や技術はいらないのだ。本書では、日々の気付きやアイデアを、より良い社会づくりに結び付ける“ソーシャルデザイン”を提案。JICAが参加する「なんとかしなきゃ!プロジェクト」もその一つだ。企業、自治体、NGO、メディア、国際機関などによる30以上のプロジェクトから、地球を救うためのヒントを見つけてみよう。



この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

ソーシャルデザイン会議実行委員会 編著
電通ソーシャル・デザイン・エンジン 監修
宣伝会議
1,575円(税込)

B OOK

『女の子の幸福論 もっと輝く、明日からの生き方』

国連開発計画(UNDP)ニューヨーク本部で、結婚、育児をしながら、開発途上国の女性の支援に取り組んできた著者。世界各国から集まった女性の同僚との出会いを通して、自身の生き方について考え直す。彼女たちが輝いていたのは、自分の“幸せの尺度”をしっかりと持っていたから。悩みながらも自らの頭で考え、前向きに歩いていくことが何よりも大切。これからの時代を、女性として幸せに生きる方法を教えてくれる一冊。



この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

大崎麻子 著
講談社
1,365円(税込)

読者の声

「2月号特集海上保安「世界の海を守る」を読んで」

■「特集海上保安」に驚きよりも頭が下がります。我々が知らないところで活動する縁の下の力持ち。日本もまだまだ捨てたものじゃないとうれしく思いました。

(香川県／男性／54歳)

■地球の大部分を占める海を守る海上保安の仕事。最近では映画『海猿』で脚光を浴びるようになりましたが、海賊対策など、海上犯罪の取り締まり強化を通じて、これからも海の道を守ってほしいです。

(福島県／女性／40歳)

「3月号特集 JICA ボランティア「世界に羽ばたけ！草の根の外交官」を読んで」

■青年海外協力隊の方々のアフリカでの献身的な活動が、将来日本に有効な経済効果をもたらすものと考えます。特に日本人の細やかな感情、親切さは、彼らに大いに受け入れられると思います。日本のもったいない精神も大切です。

(神奈川県／男性／79歳)

■「シニア海外ボランティア 東洋医学の力で未来を切り開く」は、我が身に照らして定年後を考える参考になりました。

(新潟県／男性／60歳)

■「特集 JICA ボランティア」がとても良かったです。協力隊員の方々が、それぞれのフィールドでどのような活動をされているのか、具体的に紹介されていて、JICAの取り組みに関心を持つようになりました。これからも協力隊の活動を紹介していただきたいです。

(奈良県／女性／22歳)

本誌へのご意見・ご感想や JICAへのご質問を お寄せください。

プレゼント
付き

添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報は統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2013年7月15日

Eメール：jica@idj.co.jp
FAX：03-3221-5584(『JICA's World』編集部宛)

- ① インドのオーガニックコットンの商品
- ② 書籍『アイデアは地球を救う。希望をつくる仕事 ソーシャルデザイン』(p37参照)
- ③ 書籍『女の子の幸福論 もっと輝く、明日からの生き方』(p37参照)



①



③



本誌をご希望の場合は
下記方法で
お申し込みください。

申込方法

本誌をご希望の方には、送料をご負担いただく形でご送付いたします。巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月を明記の上、指定の金額を郵便局でお支払ください。入金確認後、発送手配をいたします(入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください)。複数冊、またはバックナンバーをご希望の方は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 総務部(発送代行)
住所 〒102-0083 東京都千代田区麹町3-2-4 麹町HFビル9F
TEL 03-3221-5583
FAX 03-3221-5584
Eメール order@idj.co.jp

次号予告 (2013年7月1日発行予定)

エネルギー

日に日に暑さが増す7月。クーラーをつけたいけれど、節電が気になる季節だ。開発途上国のエネルギー事情もさまざま。電気を使いたくても使えない...そんな人々に救いの手を差し伸べる日本の技術力を紹介します。

JICA's World

JUNE 2013 No.57

編集・発行／独立行政法人 国際協力機構 Japan International Cooperation Agency : JICA

〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル
TEL : 03-5226-9781 FAX : 03-5226-6396 URL : <http://www.jica.go.jp/>
バックナンバーはJICAホームページ(<http://www.jica.go.jp/publication/j-world>)でご覧いただけます。
本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



©Yuki Asada

オーガニックコットンで心を豊かに

普段使っているモノが、ちょっと世界のためになる。そんな生活を送ってみたい人におすすめなのがカタログ通販の「フェリシモ」。ページをめくると、オーガニックコットンで作られたおしゃれアイテムがずらりと並んでいる。

通信販売と国際協力。この意外な組み合わせをビジネスにしたのが、株式会社フェリシモの葛西龍也さん。その名も「PEACE BY PEACE COTTON PROJECT」。キーワードは言わずもがな“コットン”。舞台は綿花の一大生産地のインドだ。

「普段着ている洋服が、開発途上国での児童労働や環境破壊から生まれているとしたら…。買い物をする時にちょ

っと考えてほしいと思ったんです」と葛西さん。自ら何度もインドに足を運び、現地のNGO、日本の繊維商社と協力して、農薬を使わないインドのオーガニックコットンの商品化に乗り出した。

「毎年訪れるたびに、農村の女性や子どもたちがどんどん輝いていくのが分かります。彼らの笑顔を見ていると、こちらが力わいてくるんです」。日本国内ではいろいろなブランドとコラボレーション。売り上げの一部は、インドの人々の“平和な生活”を願い、有機農業や子どもの教育などの支援に使われている。

生産にかかわる人たちの優しさがつまったモノを身に着けると、どこか温かい気持ちになるから不思議だ。



オーガニックコットンはインドの人々の手で丁寧に育てられ、収穫されていく

★化粧品バッグを4人、バスタオル、インド国旗色のTシャツ(Mサイズ)を各3人にプレゼント!→詳細は38ページへ

「PEACE BY PEACE COTTON PROJECT」の商品のお買い物はこちらから→www.felissimo.co.jp/pbp/





私の なんとか しなきゃ!

Vol. 32

PROFILE

1972年岐阜県出身。シドニー五輪女子マラソン金メダリスト。2008年10月に現役引退後、スポーツキャスターやマラソン解説者などとして活躍。09年、月刊「ソトコト」と協働で、ケニアの子どもたちに靴を贈る「スマイル アフリカ プロジェクト」を設立。2011年にJICA オフィシャルサポーターに就任。「なんとかしなきゃ!プロジェクト」著名人メンバー。

見えないベールに包まれた国一。昨年ミャンマーに行くまで、私はそんなイメージをずっと抱いていました。でも現地に一歩足を踏み入れた瞬間、それはサーツと取り払われて、国も人も、私にキラキラとした姿を見せてくれました。

現役を引退してから、世界各地で応援してくれた皆さんに恩返しをしたいと、ケニアの子どもたちに運動靴を届ける活動を続けてきました。アフリカには良きライバルのランナーがたくさんいましたし、彼らの祖国のために何かしたいと。そして何よりも、マラソン選手だった私にとって、「靴」には特別な思いがありました。

この活動が縁でJICAの方々とのつながりが生まれ、幸運なことに、オフィシャルサポーターのお話をいただきました。日本の市民の皆さんの代表として、開発途上国に足を運び、その国の日常、そして日本の国際協力の現場で繰り広げられている人間のドラマをしっかりと見て、自分の言葉で伝えていこうと心に決めました。



そして、最初に訪れた国がミャンマーです。この数年で民主化が進み、日本にも少しずつ情報が入ってきてはいましたが、実際どんな国なのか、どんな人たちが住んでいるのか…まったく想像ができません。行く前は正直少し不安がありました。でも固定観念を持たず、これからミャンマーが、この国の人々が、どのように進んでいこうとしているのかをしっかりと目に焼き付けてこようと思いました。

現地に着いてみると、「謎めいた国」だったミャンマーが、一気に身近になりました。都市にも地方にも美しい風景が広がっていて、人々は目が合うと素敵な笑顔を見せてくれたからです。

JICAが支援するろう学校では、子どもたちのたくましさ逆に励まされました。障害があるがゆえに家庭で居場所がない子もいると聞いていたので、みんなどんな表情をしているのかなと思っていたのですが…。ちょうどJICA専門家の方が手話を教えているところで、みんなとても楽しそうに「今日はこの手話ができるようになったよ!」とうれしそうに見

せてくれたんです。その時の笑顔は、今でも頭に焼き付いています。

そしてもう一つ、印象に残っているのが陸上のナショナルチームです。ミャンマーではオリンピックを知らない人がほとんど。それでも、それ以外の大会に向けて、どの選手も国の代表であることに誇りを持って練習に取り組んでいました。その真面目で誠実な姿は日本人の選手にどこか似ていて、これからはとても楽しみだと思いました。

今回の訪問を通じて、ミャンマーに未知なる可能性を感じる一方、この急速な変化に現地の人たちがついていけるのか少し心配です。彼らがずっと大切にしてきた心の豊かさが失われることなく、この国が発展していくことを願っています。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ で

優しさにあふれた国

高橋 尚子

スポーツキャスター

TAKAHASHI Naoko